ISSN 0386-4790

国文学研究資料館報

第20号
昭和58年3月

創立十周年記念式典

祝辞

本日、ここに国文学研究資料館創立十周年記念式典が挙行されるに当り、ひとこと御祝いの言葉を申し述べます。

申すまでもなく、国文学の古典は、わが国文化の優れた所産として後世に継承されるべきものであり、これらの古典に関する研究は、日本文化のために重要不可欠のものであります。当館設置以前においては、国文学に関する文献・資料は戦災によって失われたものも多く、不慮の災害による減失や虫害等の危険にさらされ、国外流出も少くない状況にありました。また文献資料の収集・保存・利用に関しては、各研究機関や研究者が個々別々に計画を進め、相互の組織的協力及び共同利用の体制が不十分な状態にありました。

文部大臣祝辞（植木浩学術国際局審議官代読）

このような状況下において、関係各方面からの御要望に応え国文学の一層の発展を期するため、関係文献・資料の組織的な調査研究及び収集・整理・保存と共同利用体制の確立を目指し、昭和四十七年五月、国立大学共同利用機関として国文学研究資料館が創設され、国公私立大学等の研究者の利用に供することとなったのであります。

また、近世史料についても、国文学の文献・資料と同様の状況にあったので、文部省がその収集事業を開始し、昭和二十六年に文部省史料館を設置しましたが、国文学研究資料館が創設される際に、これを包括したものであります。

創設の日から十年、この間、関係各位の並々ならぬ御尽力と各方面からの協力援助により、国文学研究資料館は、国文学の文献・資料と書誌情報の殿堂としてゆるぎない地位を築きつつあります。

一方、当館は、世界各国から日本文学研究者を迎え、日本文学の研究の場を提供し、海外における日本研究及び国際相互理解の促進にも大きく貢献しているのであります。

今後、国文学研究資料館においては、国内における未収集の国文学に関する文献資料のみならず海外に流出した古典籍等の調査・収集により、国文学に関する情報の網羅的な収集を行うとともに、年次計画で整備が進められている古典籍総合目録作成事業の成果の上に、全国の国文学研究者に対し迅速・的確に国文学情報を提供する情報システムの形成が急務であると考えます。また、近世史料の共同利用のため所在情報の整備を促進するとともに、近世史料取扱い者の養成事業等についても引き続き充実をはかることが必要であると考えます。

皆様も御承知のとおり、現下の財政状況は誠に厳しいものがあり、研究所の見直し等も強く要請されているところであります。このような時期にあたり、関係各位の一層の御尽力と御協力により、創設以来ここに十周年を迎えた国文学研究資料館が、今後、ますます充実した発展をされるよう心から祈念して本日の祝辞といたします。

昭和五十七年十月二十九日

文部大臣　小川平二

目次

祝辞　文部大臣　小川平二……1
国立民族学博物館長　梅棹忠夫……2
十周年に当って　松尾　聡……3
J・ストラミジョーリ……4
韓国における日本文学研究　金　孝子……6
第六回国際日本文学研究集会　O・リディン……8
EAJS第三回国際会議　共同研究……9
文庫紹介②鹽竈神社……10
文献資料部事業報告……11
研究情報部事業報告……12
整理閲覧部事業報告……13
利用者へのお知らせ……15
昭和五十八年度春季学会開催一覧……16
棚町知弥……9
新藤協三……10
福田秀一……11
棚町知弥……12
本田康雄……13

国文学研究資料館　創立十周年記念式次第
昭和57年10月29日(金)・午前11時
国文学研究資料館

開式の辞　館長　小山弘志
式辞　文部大臣　小川平二
祝辞　国立民族学博物館長　梅棹忠夫
―祝電披露―
十周年にあたって　学習院大学名誉教授　松尾聰
ローマ大学教授　ジュリアナ　ストラミジョーリ
閉式の辞
（祝賀会　12時より）

祝辞

国文学研究資料館が、昭和四十七年五月国立大学共同利用機関の第二号として創設され、順調な発展を遂げつつ、ここにめでたく十周年を迎えられましたことは誠に喜ばしいことでありまして、心からお祝い申し上げます。

わが国の国文学研究は、壱千有余年の歴史をもち、現存する古文献も世界で類をみないほど豊富であると聞いております。資料が豊富であればあるほど、研究者や勉学者の側からは、資料が一ヵ所に整理保存され、同時に膨大な研究情報も蓄積されているというようなセンターの設置が要望されるのは当然のことであります。

国文学研究資料館は、このような関係者の大きな期待のもとに創設され、爾来全国の国文学文献資料について調査を行い、それらを収集・マイクロ保存などの大変困難な事業と研究情報の蓄積・検索などに、着々と成果を挙げられて研究に志す人々の便益に多大の貢献をされるとともに、国文学の研究において大きな業績を挙げてこられました。このような国文学研究資料館の発展充実は、市古前館長、小山現館長はじめ関係の皆様方のなみなみならぬ御熱意と御労苦の結果であると深甚なる敬意を表する次第であります。

ところで、国文学研究資料館と私共の国立民族学博物館とは深い関係があります。と申しますのは、昭和四十八年四月私共の博物館が創設準備に入ったとき、その準備室が本研究資料館に設置されました。そして一年間、創設後日も浅く、多忙をきわめる研究資料館で、私共の面倒をみていただきました。私は、この間国文学研究資料館教授の辞令を受けておりまして、現在もそれを誇りとしています。また、博物館の基盤となる標本資料につきましても、かつて渋沢敬三先生が中心となって収集されました民俗資料がこの国文学研究資料館の史料館に引き継がれておりましたが、その中から民具等の資料二万八千点余りを民博の設立を契機に移管していただきました。このような経緯もあって無事国立民族学博物館が誕生したわけであります。私共としては単に国立大学共同利用機関の仲間というだけでなく、今日の民博が存在する礎を築いていただいたわけでありまして本日の十周年の慶事をお祝いするとともにあらためて、感謝申し上げる次第であります。

国文学の世界は広く、研究も多岐にわたりまた研究者も多く運営も大変なことと存じます。それだけに期待も多いわけでありまして十年の節をこえてさらに充実を図り、国文学研究の中枢機関として、その進展に尚一層寄与されることを念願いたすものであります。

最後に国文学研究資料館の今後益々の御発展を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

昭和五十七年十月二十九日

国立民族学博物館長　梅棹忠夫

十周年にあたって

発足してから十年というのは、そう長い時間ではありませんが、国文学研究資料館が、その長からぬ年月の間に、現在見られるような、見事な成長を遂げたのは、もとよりその間における管轄官庁の十分なる理解と援助とがあってのことであろうとはいえ、直接的には市古・小山旧新両館長ならびに館員各位の旺盛な意欲と不断の情熱とが、発足以来の厳粛な使命感に支えられて、着々と事を進め、物を整え、積み重ねつづけてゆかれた努力のたまものであることを思い、謹んで敬意と祝意とをささげたいと存じます。

紀元七一二年に成った古事記あたりを初めとして明治改元までの、一二〇〇年に近い年月の間にあらわれた文学文書の数は、想像に絶するほど厖大なものがあったでありましょうが、例えば一二七一年に成った風葉和歌集という物語歌を集めた歌集に見える二百種の物語が、それから二百年後の応仁の乱を経た頃には、僅かにその一割の二十種ばかりを残して凡て亡び去ってしまっていたらしい、というような事実からも想像されるように、幾度の天災、とりわけて火災は、多くの文書を年々亡ぼしつづけました。現にこの六十年ばかりの間にさえも、大正の震火災、昭和の戦火災が、かけがえのない貴重な文書類を、恐らく何十万という数をはるかに越して亡ぼし去ってしまったことを、私どもはまざまざと目に見、耳に聴かされています。

こうした天災、火災などをくぐり抜けて、幸にも現在に伝え残された文書の名のほとんどは、かの「国書総目録」八冊の中に集められておりますが、文学文書と限定すれば、その八冊の中の、更に一部分にすぎないわけで、明治を溯る一二〇〇年という長い長い年月の間に、それこそ一日の休みもなく日本全国で書かれ写され、あるいは印刷刊行されていたはずの、その総量と思い比べれば、残されたものの、あまりにも僅少なことに慄然とせざるを得ないと申せましょう。

かくて、これ以上、天災火災などによる文学文書の滅亡を空しく座視していてはならない、民間の力の及ばぬ限りは、一日も早く公の力によってその滅亡を防ぎとめる方策を講じてもらいたい、それにはまず各地各所に伝存する文学文書の、いやしくも何らかの価値あるものの、可能な限り多数の複写本を作り集め、さらにそれらについての調査をも加えて、末永く国文学古典の研究を栄えさせるための公の機関を作ってもらわなければならない、という久松潜一博士の切実な念願が、昭和四十二年の春、国文学関係の三十に近い学会の総連合を生み、やがて博士の念願の趣旨を体しての、博士を中心とする総連合関係者たちの、その筋への献言・請願となり、その五年後に、めでたくこの国文学研究資料館が成った次第でありますが、それから十年を経た今日、資料館設立の第一目的である文学文書のマイクロフィルムなどによる複写収集は、はやくも

五万点に達し、それも原本所蔵者の公開を禁じておられるものを除いては、すべて、すでに広く研究者たちの利用に供せられている由でありますから、さらに十年二十年ののちには、それらの収集が、あるいは二十万点、三十万点ともなれば、昭和初年の頃の私どものように、東奔西走して公私の図書館・文庫・蔵書家を一軒一軒訪ね、限られた時間の中で、謹んで拝見し調査し書写する苦労などは、よほど特別な場合を除いては、無用となり果たすことでありましょう。今後の研究者のしあわせは、私どもには、いささか空恐ろしくさえ覚えると申したいほどであります。

また、この資料館では、年々の逐次刊行物所載の論文類の大多数を収集所蔵し、その閲覧や複写サービスに応じている由でありますが、これ又、昭和初期の研究者だった私共としては夢としか思えぬ恩恵であります。その他、大学院教育への協力、解題研究を中心とする共同研究、海外の日本文学研究者との交流、講演会などの普及活動、などなど、諸方面にわたって一歩一歩着実な業績をあげておられることは、それぞれ極めて重い意味をもっていることでありまして、今後のいやましの発展を

いのらせていただきたいと思います。

機械によわい明治生まれの人間である私なので、ついつい電算機利用の効果についての讃辞を述べおくれて申しわけありません。情報処理などについて驚くべき機能を発揮しているこの文明の利器は、ついに連歌資料の処理にまで応用されようとしているとのことでありますが、こうした試みは、この資料館でこそ、はじめて可能なのでありましょう。こうした意欲的な試みは、今後ともいよいよ拡げていって頂きたいと思います。電算機に対する私個人の夢ともいうべき希望を申し述べることが許されるなら、例えば、成って既に四十年になる源氏物語大成の校本の不備の是正の必要が痛感される今日、現存する源氏物語諸本による新しい校本の作成とか、あるいは又、平安時代のすべての仮名文学作品の語彙を一つに集めた語彙総索引の作成とか、いろいろとあるのでありますが、遠からぬ日に実現して頂ければ、此の上ない幸と存じます。

いずれにせよ、国文学研究資料館ができて、国文学古典の研究は、あらゆる面において、まさに画期的な、且つ飛躍的な進歩が可能であり、将来とも可能であろうことを、この十年で確実に実証しました。この喜びは国文学研究者すべての喜びであると共に、国民全体の喜びであろうことは申すまでもありません。館の各位の一層の御努力が、今後とも限りない、すぐれた効果をあげつづけて行かれますことを信じ、創立十周年のお祝いのことばを終わらせていただきます。

昭和五十七年十月二十九日

松尾　聰

（学習院大学名誉教授）

十周年にあたって

本日、国文学研究資料館が目出度く創立十周年記念の日をお迎えになりますに当って、祝辞を述べさせていただきますことは私にとりまして、まことに光栄でございます。と同時に私の日本語が私の気持ちを十分に表現出来ませんことを残念に思い、またまことに申し訳なく存じます。

六年前日本に参りました折、私は永積安明先生におともさせていただきまして、初めてこの資料館にお伺いいたしました。当時、建物も設備もまだ十分に完成してはおりませんでしたが、当時の館長の市古貞次先生をはじめ諸先生の御説明をお聞かせいただき、大変感銘し、大きな期待を持ちましたことを昨日のことのように記憶いたしております。

その期待と申しますのは、外国の日本研究者である私どもにとりまして、日本文学の資料や文献などについてその所在を調べ、これを入手することは非常に困難なことでございまして、国文学研究資料館が完成なさった暁には、日本の学界にとりましても、私ども外国の研究者にとりましてもいかにも貴重な存在となり、便宜をはかっていただけるに違いないと大きな希望を抱いたからでございます。

このたび六年ぶりにまた日本に参りまして、先日ふたたび資料館にお伺いいたしましたところ、しずかな環境のなかで行き届いた設備を立派に完成しておられる御様子を拝見することが出来ました。

十年間の先生方の御苦心に心から敬意を表し、お祝いを申し上げたいと存じます。

どうぞ今後とも、ますます内容が充実し御研究が発展なさいますようお祈りいたします。

そしてその豊かな御成果のおすそわけを、私ども外国の研究者にもお与え下さいますよう、心からお願い申し上げたく存じます。

本日はわざわざ私のような者までお招きいただきまして、まことに有難うございました。

昭和五十七年十月二十九日

ジュリアナ・ストラミジョーリ

（ローマ大学教授）

創立十周年祝賀会

創立十周年特別展示

創立十周年記念式典および行事

記念式典および祝賀会　昭和五十七年十月二十九日

記念特別展示および同図録作成　昭和五十七年十月三十日―十一月十三日

記念公開講演会　昭和五十七年十月三十日

海外における日本文学　中村真一郎

連歌の今日　金子金治郎

記念第六回国際日本文学研究集会　昭和五十七年十一月十日―十三日

『十年の歩み』作成

国文学研究資料館の意義

松尾　靖秋

堅苦しい題目をつけたが、要するに、資料館がどんなに有難かったかという、私の最近のささやかな体験談である。

このところ私は、海外流出の日本文献で、国内には既に存在しないか、あってもごく稀な書物を海外の図書館や大学に求めるという、いささか宝探しめいたことをしている。とうてい独力で出来ることではないが、それでもいくつかの稀覯書を見付けることができた。

ロンドンの大英図書館で、数年前に俳書「しなてる草」と蕪村の「夜半帖」を見付け、更にこの冬、その内容を検討しようと彼の地に行った。前者は用紙に淡彩が施してあり、美しい冊子である。書名は花か何かの異名であろうが、内容とともに後考をまたねばならない。これは天理や洒竹その他の俳書目録にも見当らず、「国書総目録」にももちろん収載されていない。これは天下の稀書ではないかと、いささか得意であったところへ、笠間書院から資料館蔵の「マイクロ資料目録」が送られてきたので、よもやあるまいと思いつつも当ってみると、それがあった。上田市立図書館花月文庫の所蔵で、架蔵の「花月文庫分類目録」により確認し得た。これには驚いたし、正直のところ少々がっかりもした。

また、後者「夜半帖」には「斑山文庫」の印があり、高野辰之博士の旧蔵だが、これは「国書総目録」に、竹冷文庫のただ一本が記録されている。さっそく本田部長に電話して、マイクロフィッシュに入っているとの教示を得た。蕪村板下と思われる漢文序は大英のものと同一だが、俳人三十六人の画の順序がかなり異り、題簽が大英本は表紙中央だが、竹冷本は左肩にある。

資料館も今年で創立十周年を迎え、文献のマイクロ化はますます進み、われわれはこのお蔭で諸方を駆け廻る必要はなく、居ながらにして稀書にめぐりあうことができる。浜の真砂の中から一粒を拾い出すようなものだが、資料館の有難さをしみじみと感じた昨今である。

（工学院大学教授）

韓国における日本文学研究

金　孝子

韓国における日本文学研究は、終戦以来久しく断絶されていた韓日両国の国交が正式に再開された一九六五年の「韓日協定」の時点から新に始まったといえる。

勿論韓国と日本との交流の歴史はずいぶん古い。遠くは四―七世紀にかけての百濟と日本との文化的提携を始めとして、十五―十八世紀の足利・徳川両幕府時代においての朝鮮通信使等による数多い日本紀行文などは、まさしく韓国人による日本文化または日本文学研究のきっかけになっている。

しかし、本稿はそういう歴史的いきさつを考察するのが目的ではないので、ここではただ冒頭に掲げたように韓国における日本文学研究の現状をありのまま紹介するにとどめたいと思う。

一、大学における日本文学講座と関連研究機関

韓国における日本文学研究は、その大部分が大学の日本文学科と大学の附設研究所またはそこに勤めている教員等によってなされている。

周知のとおり、韓国においての大学の日本文学講座の設置はごく日浅いものであって、それをきっかけとする日本文学の研究もその歴史が未だに浅いといわざるを得ない。

韓国で最初に日本語学科が設置されたのは一九六一年、韓国外国語大学においてであったが、外国語大学の特性上それは語学訓練を主とするものであった。ついで、一九六二年にはソウル国際大学に日本語日本文学科が設置されたが、それも夜間講座であって日本文学研究がその軌道を辿るには一九七〇年代を待たなければならない。というわけは、韓日の国交正常化以後、ある程度の過渡期が過ぎると、大学に日本語日本文学科が一挙に設置されて、その研究熱を盛り上らせる雰囲気を造成したからである。一九七三年の春には、誠信女子大学、清州大学、関東大学などに日本語日本文学科が、啓明大学、慶尚大学などに日本語教育科が創設された。翌年の七四年度には世宗大学、建国大学などの六つの大学に日本語日本文学科が新に設置され、一九八〇年までにはその数が三十七個所に至っている。その中には日本語教育科（六個所）、日本語科（一個所）、日本学科（一個所）などもあるがそのほかは日本語日本文学科という名稱である。また、韓国外国語大学、啓明大学、崇田大学、誠信女子大学、建国大学、祥明女子師範大学など六つの大学にはすでに大学院も設置され、日本文学研究者を毎年続々と輩出しつつある。一九八一年度には韓国外国語大学大学院に、はじめて博士課程が設置された

このように韓国における日本文学研究熱は年毎に増加しつつあるが、しかし、ソウル大学をはじめとして大部分の国立大学や、伝統ある名門私立大学が概して日本文学講座の設置を保留している現状は注目にあたいするものである。これには色々とからんだ問題があるわけであるが、学術の専門性とその国際性に伴なってそういう問題点は近い将来に解消し得るものと思われる。

そもそも学問の研究は、その成果を適切有効に資料化することによってその効果が客体化されることになる。その意味において、「韓国日本学会」の並ならぬ役割は特記すべきものであると思われる。

「韓国日本学会」（会長・李栄九）は、一九七三年二月に創立された。この学会は、客観的・学問的日本研究を建前にして発足した韓国においての最初の日本研究学会である。創立当年から毎年欠かさず研究誌「日本学報」を発行し、年例行事として会員の研究発表会、在韓日本人学者との共同発表会、国際学術発表会などを開催している。八二年現在十号まで発行された「日本学報」には、文学関係の論文が三十餘篇も発表されており、韓日両国の学者による国際学術発表会も八回に及んでいる。いわば韓国日本学会は、大学に日本語日本文学科が設立された時期から、日本文学研究の成果を発表する場として、または文学研究に関する情報をわけあう場としてその役割を十分に果して来た。このように韓国日本学会が日本文学研究に寄与した功績は格段のものとして記すべきであろう。

一九七八年四月に「韓国日語日文学会」（会長・全基定）が創立され、研究誌「日語日文学研究」を第二号まで発行している。研究誌には会員の日本語日本文学、日本語教育に関する論文を掲載し、四回にわたる会員の研究発表会があり、「日本語研究実態調査」など韓国における日本語日本文学研究に大いに寄与している。

学問の研究を持続的、体系的に後援し研究意欲を鼓舞する必要からしても研究所の設置は要請されるものであるが、現在のところ韓国には日本文学を専門的に研究する研究所はまだない。ただ、日本学とか日本文化研究をたてまえにしている大学附設研究所でかたわらにごく一部日本文学も研究している状態である。東国大学の「日本学研究所」、中央大学の「日本研究所」、啓明大学の「日本文化研究所」、嶺南大学の「韓日関係研究所」、釜山大学の「韓日問題研究所」、徳成女子大学の「韓日比較文化研究所」などが現在韓国にある日本関係の研究所である。ちなみに右記の大学にはみな日本語日本文学科が設置されていることを付記する。

各研究所は、特色ある文化研究の側面を開拓しつつあるが、それに並んで日本文学研究もこの先もっと活発になされることが期待される。

二、日本文学研究の現状

一九七〇年代以降に発表された日本文学関係の論文と著書を中心にその主な傾向を次にとりあげてみることにする。

「日本学報」(三十)

「日語日文学研究」(十)

各大学の論文集(三十九)(この中には修士の学位論文も含まれている)

「比較文学・比較文化」(二)(韓国比較文学会研究誌)

其の他の学術誌及び単行本(五)

以上の八十九点の論文を取り上げることにするが、各大学で発行された論文集や日本文学と直接関係のない学術誌が調査の対象からもれているので、この外にも日本文学関係の研究論文や著述があり得るということをあらかじめことわっておく。ここに取り上げた論文の執筆者は大部分大学の日本文学教育にたずさわっている教員であるが、中には比較文学の立場で日本文学を考察した韓国文学者、フランス文学者、ドイツ文学者もいる。

まず八十九点の論文を近・現代文学、古典文学、比較文学に分類してその内容を考察することにする。

(1)近・現代文学(四十三)

近・現代文学においては小説の研究が圧倒的に多い。研究のテーマを部門別・対象別に分類するとだいたい次の通りである。

小説―作品論(十三)、作家論(二十)

詩歌―作品研究(一)、作家研究(二)、民謡(一)

随筆―作品研究(一)

文学論―小説論(一)、文芸思潮(五)

小説の研究において作品研究では「藪の中」「刺青」「浮雲」「雪国(二)」「破戒(二)」「十三夜」「伊豆の踊子」「三四郎」「斜陽」「河童」「蒲団」などが取り上げられており、作家研究では二葉亭四迷、森鷗外(三)、樋口一葉、永井荷風、谷崎潤一郎、大宰治、三島由紀夫(三)、志賀直哉(二)、芥川龍之介(五)、川端康成(二)　上田秋成、それに女性作家に対する考察が加えられている。以上で見る近・現代小説研究は、日本の近代文芸思潮の流れの中で重要な位置を占めている作家作品を広くその研究対象として取り上げているのが特色であるといえよう。

詩の研究では、モダニズム運動に関して、与謝野鉄幹や石川啄木に関して考察しているが他の部門にくらべて量的に研究実績が少ないほうである。

小説論では坪内逍遙の小説神髄が、文芸思想の研究では自然主義の特質(四)や日本私小説の成立要因などが日本における西欧文学の受容過程の考察の上でとらえられている。西洋的なものを如何に日本的なものとして同化させていったかという点に関心が注がれている。

(2)古典文学研究(三十一)

古典文学関係の論文三十一点を、テーマ別に分類して簡単に整理してみると次の通りである。

散文―「源氏物語」研究、「提中納言物語」(二)「平家物語」、平安時代の日記文学(二)、「枕草子」(二)、「方丈記」(三)、「徒然草」(三)、卜部兼好研究、世阿彌の芸能(二)、「奥の細道」(二)、其の他古典文学にあらわれた幽玄の問題、武士道の考察などがある。平安時代の文学に多く関心が注がれ中世、近世に下るほどその量が少くなくなるのが傾向だといえる。

詩歌―萬葉集、和歌、短歌の修辞などについての研究があり、芭蕉研究(八)がこれに加えられる。また、芭蕉についての論文で博士学位を取った学者もいる。

(3)比較文学(十五)

最近日本文学は、比較文学・比較文化的側面からもより多く関心が注がれるようになった。最近数年間の論文集または単行本に出された論題には次のようなものがある。

韓日人形劇の比較、和歌と時調(韓国固有の定型詩)との比較研究、韓

日寓話小説の比較(二)藤村の詩と素月(韓国の近代詩人)詩との比較、韓日民譚の比較、「海潮音」と「奥悩の舞踏」(韓国最初の近代翻訳詩集)との対比、ゾラの自然主義と日本自然主義との比較、戦後日本詩と韓国詩との比較、東西芸能の比較、近代翻訳詩の対比、「韓日文学の関連様相」(著書)などがあり、比較文化的側面からの研究成果としては最近出刊された「縮み志向の日本人」(李御寧)がかぞえられる。

三、韓国における日本文学資料文献

韓国において日本文学の古典文献は、主に国立中央図書館とソウル大学図書館に保存されている。ソウル大学図書館の日本古典文学文献は、李栄九教授の調査によって「日本学報」第四号と第六号に掲載されたが紙面の関係上その紹介を略する。なお近代・現代文学の資料は、日語日文学科が設置されている各大学の図書館所蔵が大部分であるが大幅に不足している。

以上、韓国における日本文学研究の現況を簡単にのべた。韓国においての日本文学研究の歴史は浅いので、現在のところ刮目するほどの研究成果があるとはいえないが、しかし今日では学者の日本研究熱がおおいに盛り上り、若手の関心も年毎に高まりつつあるのでそのめざましい研究成果を近い将来に期待することができることと確信する。

(京畿大学教授)

第六回国際日本文学研究集会

今回の第六回集会はちょうど当館創立十周年に当るので、その記念事業の一環として、やゝ規模を大きくし、四日間(例年は二日間)の日程で行われた。

十一月十日(水)、午後一時から参加登録受付けを行い一一七名(うち海外三七名、期間中受付を含む)の参加があった。第一日は、

(1)開会あいさつ、小山弘志館長

(2)特別講演

ケネス・ガードナー(英国図書館副部長)「美術品としての日本の書物」

ドナルド・キーン(コロンビア大学教授)「日本古典文学の翻訳について」

(3)催し、若松若太夫、説経浄瑠璃演奏「さんせう太夫」

(4)レセプション

が行われた。

十一月十一日(木)は、

(1)研究発表(各二十五分)

ケネス・ヘンシァル(オークランド大学准教授)「田山花袋が抱いていた自然のイメージ」

翁蘇倩卿(淡江大学教授)「日本近代文壇に於ける『聊斎志異』の受容と変容」

鶴崎裕雄(帝塚山学院短期大学助教授)「中世後期、古典研究の一側面―近衛尚通の場合―」

(2)招待発表(各三十五分)

李栄九(崇田大学教授)「芭蕉俳諧の時間性」

オロフ・リディン(コペンハーゲン大学教授)「『風流使者記』から『峡中紀行』へ―荻生徂徠の紀行文学―」

イリナ・ルヴォーヴァ「日本中世叙事詩における個人像、その原則と方法―『平家物語』に基づいて―」

フランク・ホフ(トロント大学教授)「観客の運命―三つの関係―」

十一月十二日(金)は、

(1)研究発表(各二十五分)

潟沼誠二(北海道教育大学教授)「幸田露伴の外国を見る眼―露伴文学の解読のひとつの試み―」

アンソニー・リーマン(トロント大学准教授)「シンボリズムの流行と井伏の『鯉』」

ヨシコ・ヨコチ・サミュエル(ウエスリアン大学助教授)「大江健三郎とロシアンフォーマリズム」

(2)招待発表(各三十五分)

ミコライ・メラノヴィッツ(ワルシャワ大学教授)「古井由吉・古山高麗雄などの小説の主人公」

ジャクリーヌ・ピジョー(パリ第七大学教授)「道行文に見る故事について―お伽草子を中心として―」

ジェームズ・アラキ(ハワイ大学教授)「百合草若の物語の由来」

が行なわれ、それぞれ活潑な質問や討議もあった。なおこのあとティー・タイムとして参加者の懇談が行われ、当館の論文データベースの機械検索テストの披露もあった。

十一月十三日(土)最終日は、

(1)公開講演

ウィリアム・マカラ(当館客員教授、カリフォルニア大学バークレ教授)「文芸としての日記―王朝文学を中心に―」

山中裕(関東学院大学教授)「藤原道長と『御堂関白記』」

が行われ、集会参加者のほか五十名の聴講者があった。

(情報室)

ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)第三回国際会議について

オロフ・リディン

ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）は、一九八二年九月二十日から二十三日まで、オランダのハーグにおいて国際会議を開催した。この会議は、一九七六年のチューリッヒ会議、一九七九年のフィレンツェ会議に引き続く第三回会議で、国際交流基金（Japan Foundation）、オランダ政府、およびハーグ市の援助のもとに、EAJSが同国日本研究協会（NAJS）と協力してオーガナイズしたものである。なお次の第四回会議は一九八五年にパリで開らかれる計画である。

第一日午前の参加者登録の後、午後からNAJS会長Frits Vos教授、EAJS会長、Charles Dunn教授および国際交流基金代表のうちの一人、木本三郎ケルン文化会館長（他の一名は雨宮夏雄ロンドン事務所長）のあいさつによってオープニングが行われた。またDunn教授は同日午後のメイン・スピーカーとして講演を行った。

九月二十一日、二十二日の両日は七つの分科会（経済および経済史、社会学・教育学および文化人類学、歴史学・政治学および国際関係論、言語学および言語教育、文学、演劇・美術および音楽、宗教および哲学）に分れて約八十の論文が発表され、二〇〇人以上の参加者がヨーロッパの二十の国のほか、日本、カナダ、イスラエル、インドネシアおよび米国から集った。その中には塩野谷裕一（一橋大学）、白土わか（大谷大学）、武田清子（国際キリスト教大学）など国際交流基金によってサポートされた招待発表者も含まれている。各発表は多彩で質も高く、また討議も活潑であった。

最終日は各分科会コンビーナによる報告と、新役員の選出が行われ、会長にO.Lidin教授（コペンハーゲン大学）、副会長にA.Boscaro教授（ベニス大学）・M.Melanowicz教授（ワルシャワ大学）、事務局長にH.Rotermund教授（パリ第七大学）会計長にE.Pauer博士（ボン大学）、理事会メンバーにIan Nish教授（ロンドン大学）、B.Powell博士（オックスフォード大学）が前会長C.Dunn教授とともに任ぜられた。また、P.Harries博士（ロンドン大学）、G.Daniels博士（シェフィールド大学）は、それぞれ、EAJS紀要、および会議録の編集者となった。

学術的プログラムのほかに、広いコングレス・センターで各スポンサーによるパーティが行われ、一回は、駐ハーグ日本大使によるパーティーが、ちょうど特別展示開催中の市立博物館で催された。

以上のような次第で、豊富な学術的収獲と日本研究者の一層の友好関係を深めてこの会議は終了した。

共同研究

昭和五十四年度より五十六年度に至る四年間にわたる俳書班の成果が、国文学研究資料館共同研究報告(2)『酒田市立光丘文庫俳書解題』として、明治書院より昭和五十八年一月三十一日、発行された。

昨年六月十八日に開かれた第一回の共同研究委員会（館報19号に報告）以後の実施状況、ならびに、二月二十四日の第二回委員会で策定された五十八年度の研究計画は次のとおりである。

(1)「逸翁美術館蔵国文学資料」の解題研究

館外二名、館内三名の共同研究員に、文献資料部第四室の客員・米谷巌氏の助力を得て、近世の俳諧関係資料の調査にとりくんだ。中古・中世の作品についての研究は、当プロジェクトに先立つ科研の期間より引き続いで実施している。

二年目の明五十八年度も右のまま続行し、同年度内に成果刊行の原稿化までを予定している。

(2)「連歌資料のコンピュータ処理」の研究

三年計画の初年度は、館外七名、（うち五名は公募による。来年度も引き続きこのメンバーで行なう）、館内三名、計一〇名の共同研究員全員による討議を三回開催し、また、その合間には在京メンバーによる試行と検討を重ねて、二月末現在、データ・ベース化へのフォーマットを策定し、カード（コーディング・シート）採録作業開始にまでこぎつけた。三月には四回目の全員討議を兼ねて、館蔵の連歌資料の特殊目録作成のため

の作業を開始する。一方、紙焼写真による在宅作業もはじめており、夏休み前までに、第一段階としての三、〇〇〇点収録を計画している。

二年目の五十八年度には、右の試行をふまえて、本格的なカード収録作業をすすめ、館蔵資料については収集を終え、情報処理の段階（プログラミング）へ移行したい。

一方、連歌資料の全国にわたっての調査収集については、当プロジェクトの規模の及ばぬところなので、別途に計画（五十九年より三年間を予定）を立案する必要があり、本共同研究はその「方法」の開発と実施計画の討議策定を目的とするものである。

(3)「平安時代の貴族社会と文学」の研究

客員教授として七月～十二月在館のカルフォルニア大学バークレイのW・マカラ教授と山中裕・池田尚隆共同研究員の間で、『御堂関白記』の輪講や京都方面調査などが実施された。また、その成果の一端は、マカラ教授・山中教授の第六回国際日本文学研究集会における公開講演により報告された。

(4)「日本文学の発想」の研究。来年度客員教授として来館されるブリティッシュ・コロンビア大学の鶴田欣也教授を中心とするものである。この研究は「日本文学の特質」という長期の研究テーマの一部であり(3)の研究もその一環のものとして位置づけられている。

（棚町知弥）

国文学研究資料館紀要第九号

土佐日記論　平沢竜介
三十六人仙伝補考　新藤協三
松花和歌集巻第六以下の零本（紹介と翻刻）　福田秀一
絵解き「苅萱」考　小林健二
版本・ちんてき問答　渡辺守邦
高見順《文学非力説》を繞って　奥出　健
UNIMARC.RM:覚え書き内藤衛亮

国文学研究資料館共同研究報告2

酒田市立光丘文庫俳書解題
付　庄内俳壇史藁草
研究経過概要報告／凡例
酒田市立光丘文庫俳書解題
光丘文庫と庄内俳諧史
庄内俳壇史藁草
年表／書名索引
（国文学研究資料館編・明治書院発行、定価七、九〇〇円）

文庫紹介③

鹽竈神社

式内社として著名な鹽竈神社には、村井敬義古巌（？～一七八六）の旧蔵書が二百数十点襲蔵されている。古巌旧蔵書の多くは、現在神宮文庫に収蔵されるが、それとともに、古巌蔵書の一部が鹽竈神社の所蔵に帰した経緯については、山田孝雄著『典籍説稿』（昭和八年刊、二九年再刊、西東書房）に詳しい。それによれば、天明四年（一七八四）に伊勢の神宮文庫に和書三千七百余部を寄贈した古巌は、その後奥羽廻遊を企て、塩釜に至って病を得て、祠官藤塚氏宅にて没するが、藤塚氏の請により遺蔵の書を鹽竈神社に奉納したものである。

国文学研究資料館では、同神社の御協力を得て、昭和五五年度に古巌旧蔵書全二三七点を調査、翌五六年度に二三五点を収集した。これらのうちには史書、有職関係の書も少なくなく、心ずしも文学関係の書が多いとは言えないが、文学書の中には資料的に貴重なものもあり、例えば、昭和二年高野辰之博士によって世に紹介された『業平躍歌』や、現在唯一の孤本『四国遍路日記』等が含まれる。

同神社博物館学芸員の伊豆倉正廣氏のお話では、本蔵書の仮目録（昭和一六年の調査に基づいて作成）もあり、閲覧の便に供さぬでもないが、出納に極めて手間がかかり、かつ、保存状況も良好なものばかりではないので、当館で収集した紙焼写真が広く研究者に利用されるのは、かえって有難いとのことであった。同神社の古巌旧蔵書がマイクロフィルムで当館に収集されたことは、その点でも意味のあることであろう。なお、稿者は本蔵書の調査に携わった一人である。

（文献資料部　新藤協三）

鹽竈神社
場所　〒985　宮城県塩釜市一森川一番地
電話　〇二二三六―二―一〇四九

文献資料部事業報告

福田　秀一

他の記事でも書かれるかと思うが、昨年十月当館創立十周年の記念行事が催され、われわれはこの機会にもう一度当館設立の趣旨や存在の意義をふり返って、一層精励することを誓った。また、記念の冊子『十年の歩み』を編んでみて、当部の主要事業である国文学文献資料の調査収集ということに関しても、この十余年間に内外各地の所蔵者・研究者・関係者といった、非常に多くの方々のお世話になっていることを、改めて痛感した。今後ともこの国家的事業である百年の計に一層の御支援を乞う次第である。

さて、恒例に従って、主として昭和五十七年八月以降本年一月末までの当部の主な事業につき報告する。なお、例年は多く夏から秋にかけて何箇所かで文献資料調査員地区会議を催し、その報告がここに載るのであるが、現年度は予算（特に旅費）的に困難との見通しで、地区会議は見合せた。その代りとして二月八・九日に当館で地区の代表者による会議・打合せを行うことにした。

第四室

前号に報告しなかったが、昭和五十七年度は第四室に研究テーマとして日本仏教文学の研究と逸翁美術館蔵国文学資料の研究（共同研究テーマ）との二つを立て、前者は山田昭全氏（大正大学教授）、後者は米谷巌氏（広島大学助教授）が従事しているが、どちらも当部あるいは当館の教官も参加して、有益に進めている。その成果の一端は『調査研究報告』第四号（近刊）に掲載の予定である。

昭和五十七年度文献資料調査・収集の概況

一、調査

本年度は、全国各地の調査員・特別調査員ならびに所蔵者・関係者各位の協力を得て、本年一月末までに左の五十一箇所（予備調査を含む、で計七、二二六点の文献資料を調査した。所蔵者ごとの調査点数は今回も『調査研究報告』（第四号）に譲る。

北海道東北地区（順不同、敬称略、以下同じ）

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・小保内道彦（稲荷文庫）・秋田県立秋田図書館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館・会津若松市立会津図書館

関東地区

彰考館・川越市立図書館・矢口文庫・麗沢大学附属図書館・東京芸術大学附属図書館・宮内庁書陵部・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・東京都立中央図書館（加賀文庫）・久松国男・同（当館寄託本）・永青文庫・若松若太夫・国学院大学図書館・遊行寺

中部地区

新潟大学附属図書館・金沢大学附属図書館・金沢市立図書館（藤本文庫）・加賀市立図書館（聖藩文庫）・上田市立図書館（花月文庫）・名古屋市蓬左文庫（尾崎コレクション）・新城市（牧野文庫）・岐阜市立図書館・神宮文庫・某氏

近畿地区

彦根市立図書館（琴堂文庫）・西教寺・京都大学文学部（頴原文庫）・陽明文庫・歓喜光寺・大阪女子大学附属図書館・大阪府立中之島図書館・土橋留似子・大和文華館・林田良平（蝸牛廬文庫）・吉永文庫

中国四国地区

毛利報公会博物館・宇部市立図書館（新井文庫）・多和文庫・松本文庫・今治市河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

多久市教育委員会（多久市郷土資料館）・熊本大学附属図書館（北岡文庫）・臼杵市立臼杵図書館

二、収集

本年度は、今までに左の三十四箇所で計四九一八点の文献資料を収集（撮影）した。これに関しても、所蔵者はじめ関係者各位にあつく御礼申上げる。

北海道東北地区

青森県立図書館・小保内道彦（稲荷文庫）

関東地区

学習院大学国語国文学研究室・国学院大学図書館・東京都立中央図書館（加賀文庫）・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・久松国男・同（当館寄託本）・東洋文庫・文化庁・山内俊彦・若松若太夫・麗沢大学図書館・千葉県立佐倉高校（鹿山文庫）・船橋市西図書館

中部地区

富山県立図書館（志田文庫）・静岡県立中央図書館・愛知教育大学附属図書館・名古屋市蓬左文庫（尾崎コレクション）・刈谷市立刈谷図書館（村上文庫）・西尾市立図書館（岩瀬文庫）・岐阜県立図書館・神宮文庫・射和文庫

近畿地区

彦根市立図書館（琴堂文庫）・京都女子大学図書館・陽明文庫・歓喜光

寺・某寺・大阪女子大学附属図書館・林田良平（蝸牛廬文庫）

中国四国地区

山口県文書館・河野信一記念文化館

九州地区

佐賀大学附属図書館（小城鍋島文庫）

研究情報部事業報告

棚町　知弥（文献資料部長）

第十年度にふさわしく、当研究情報部としても、①拡大開催された国際日本文学研究集会の事務局（情報室）、②昭和三七年以前研究文献目録編集のまとめ（編集室）、③電子計算機の機種更新への準備（情報処理室）など、それぞれ臨時のプロジェクトにとりくんだが、幸いほぼ所期の目標を達成しつつある。なかでも、②の事業は仕事量のみならず、仕事の「質」（方法）のうえからも、慎重かつ着実に進める必要があり、館としての検討を経て、**臨時編集室**を組織して事に当ることにした。すなわち、その第一期（昭和五八年一月～六月）としては、編集室の全員に情報室・情報処理室の両助手を加えて構成するなど、部の総力を集中した。第二期（七月以降）については、作業の進ちょくに応じて四月ごろまでに計画をたてるが、文献目録委員（館外）の御協力を仰ぐとともに、全館レベルの支援体制を要請することになろう。

情報室

別稿に報告したように、創立十周年記念行事の一環として、従来より規模を拡大して計画された第六回国際日本文学研究集会は、一一七名の参加者を得て、四日間の日程を無事終了した。また、この集会の最終日に、海外から参加された発表者と国際日本文学研究集会委員とによる非公式の懇談会を行った。その際、

(1)日本の研究者の前で発表するこのような機会は、外国の研究者にとって大へんよい刺激である。

(2)ヨーロッパの日本研究協会のような組織がアジアにもあるとよいのではないか。

(3)十年前京都で行ったような大きな国際会議も、再度行ってもよい。

(4)しかしこの会議のような文学だけの集会も効果的である。発表者だけでなく、ディスカッサントもインバイト（経費は参加者負担）してもらうと参加し易い。

などの意見が出された。

会議録も従来の倍の厚さとなったが印刷中である。

昭和三七年以前の研究文献の補充調査も実施し、整理閲覧部の収集に協力した。

編集室

『国文学年鑑』（昭和五六年）の編集を行った。三月二十五日、至文堂より刊行。

「国文学研究資料館紀要」第九号は七篇の原稿を得て三月末日に刊行、至文堂より発売する。

五ヶ年計画の臨時事業「昭和三七年以前国文学研究文献目録」の作成は、残り一年を余すのみとなった現在、約三八〇〇〇件のデータを入力し了えて、その一部分には既に五校から六校が施されている段階である。キーワードとなる著者・執筆者・作品名については、表記に到るまで完全に統一しなければならぬ為、『国書総目録』等に典拠を求め、作業を進めている。二月から三月にかけて収集した最後のデータにも、同様の処理を施す必要があり、それが一段落した頃に、試作版を作る事となるだろう。

情報処理室

今年度の研究開発は、古典籍総合目録作成システムに重点をしぼり、システム全体の概要設計を行うとともに、入力部について具体的なプログラム開発を行っている。本文・語彙の検索システムは、昨年度までの科研費による基礎的な開発を受けて会話型への拡充等実用的なものとして一応完成させた。

論文検索システムは、開発を終り当館の十周年記念式典、国際研究集会等において、試験的な公開を行った。

情報処理システム運用の面では、マイクロ資料目録一九八二年版用版下、逐刊目録一九八三年版用版下、和古書目録一九八二版用版下の出力が順調にすすんでいる。資料管理システムもほとんどトラブルなく運用している。文字セット管理システムの運用は、外字の登録が年々増加の傾向を見せているが、今年度も一五〇字余りを登録した。

『国文学研究資料館報告』は、その十一冊目として「本文・語彙検索システム」を報告する。

科学研究費による研究は、今年度「国文学情報検索システムの共同利用に関する研究」（試験研究(2)代表者小山弘志）と、「データ処理システム

の為の漢字シソーラスの研究開発」（特定研究〝言語の標準化〟代表者田嶋一夫）の二件を行っている。

尚、電算機システムについては、来年度中の更新のために機種の検討を行っている。（研究情報部長）

整理閲覧部事業報告

本田　康雄

資料の収集、受入、整理、保存及び利用サービス、並びに公開講演会・展示会の開催等の定常的業務は順調に進展した。

今年度は創立十周年を迎えたが、同時に開館してまる五年がたったということで、利用サービスを担当する当部にとっては二重に意義深い年であった。閲覧、複写等の利用者も開館五年にして年間七、〇〇〇人を超えており、今後ともサービスの拡充に務めていきたい。事業の面では、記念公開講演会の開催、記念特別展示の実施等に工夫をこらし、また記念式典当日には事業の現状のパネル展示等を各部館と協力して行った。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

本年一月末における今年度の資料受入数は、マイクロ資料（オリジナルフィルムの数）一、〇八四リール、図書二、〇四四冊、逐次刊行物四、八七八巻号冊であった。また昭和三七年以前文献目録作成事業のための逐次刊行物バックナンバーの複写収集は四八八巻号冊であった。この収集にあたっては、国立国会図書館をはじめとして多くの図書館の御援助をいただいた。

(2)古典籍総合目録作成

古典籍（江戸時代以前の写本・版本）書誌データ、所在データの作成を継続して行い、並行して、作成したデータの点検・調査と、コンピュータ入力のためのパンチを開始した。当館蔵の蔵書目録の整備充実をはかり、新たに古典籍所蔵状況調査にもとづく目録類の収集作業も開始した。御協力戴いた図書館、文庫に厚く御礼申し上げたい。古典籍総合目録のためのコンピュータシステムの開発が、情報処理室を中心に開始された。途は険しいがこの事業の実現へ確実に近づきつつある。

(3)整理業務

『マイクロ資料目録一九八二年』（第六冊）は、七月以後、約三、三〇〇件のデータ作成・入力が行われ、年度内に刊行される。収録書目数は、八、九二三点である。既刊五冊と併せると収録作品点数約五二、〇〇〇点、この資料の利用者も増加し、リーダープリンターによる即日サービスが望まれる傾向が顕著である。一九八三年版（第七冊）のデータ作成も順調に進んでいる。

また、昨年度、当館所蔵原本（写本・版本）を収録した『和古書目録』が、初めて刊行されたが、その後の増加分については、『和古書目録増加1（一九八二）』として、編集作業が進められ、年度内に刊行される。収録書目数は、約八六〇点である。これには、昨年、久松国男氏（潜一氏旧蔵、追加分）と武者小路実光氏から寄託された資料も収録されている。なお、新刊書の整理については、定常的に進行している。

(4)閲覧業務

昭和五十七年七月～十二月までの入室者数は、四、六七五名で前年同期を上回ったものの、微増に止まった。複写の方は、七、六〇〇件で約一割の伸びである。引き続いて、リーダープリンターの伸びが著しく、七割近い増加となっている。

相互協力サービスは、複写が二九一件、貸出が七点あった。

なお、書庫内閉架分を中心に、雑誌の製本を二〇〇冊余り行った。

(5)マイクロ室業務

麗沢大学図書館（田中文庫）他七文庫四三六リールの作業用ネガフィルムを作製した。閲覧用ポジフィルムは、東京芸術大学附属図書館他十三文庫一〇六六リールを作製した。紙焼写真本については、広島文教女子大学図書館他五文庫の一九七七冊を作成し、閲覧に供せる。文献複写サービスでは、ポジフィルム作製二一件、撮影二七件を行った。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持に当たった。

国文学の普及業務として、左記のとおり、公開講演会・展示を開催した。

●第五回夏期公開講演会「日本の歌謡」（九月二～四日、於当館。講演集刊行予定）

二日　「古代歌謡の発想」中西進（成城大学教授）、『梁塵秘抄』について」新間進一（青山学院大学教授）。

三日　「早歌から能謡へ」外村南都子（白百合女子大学教授）、『さんさ時雨』考」浅野建二（東北福祉大学教授）。

四日　「南島歌謡」外間守善（法政大学教授）、「歌謡文学の諸問題」臼田甚五郎（国学院大学教授）。

●創立十周年記念公開講演会（十月三十日、於当館）

「海外における日本文学」中村真一郎、「連歌の今日」金子金治郎（東海大学教授）。

●特別展示

新収資料展（九月二～八日。『国文学研究資料館特別展示目録七』を刊行）

創立十周年記念特別展示（十月二十九日～十一月十三日。史料館との共同展示で、当館所蔵の代表的な資料を展示。『国文学研究資料館創立十周年記念特別展示図録』を刊行）

●常設展示

徒然草（七月十九日～八月二十六日、九月十三日～十月二十一日）

江戸から明治へ（十二月一日～五十八年三月二十四日）

（整理閲覧部長）

内地研究員

氏　名　石井由紀夫

現　職　北海道教育大学教育学部講師

研究題目　軍記物語史の研究

期　間　昭和五七年九月一日～昭和五八年二月二八日

指導教官　村上　学

私学研修員

氏　名　麻原美子

現　職　日本女子大学教授

研究題目　室町時代物語と語り物の研究

期　間　昭和五七年四月一日～昭和五七年五月三一日

外国人研究員

氏　名　ウィリアム・ホイト・マッカラウ

現　職　カリフォルニア大学バークレイ教授

研究題目　平安時代の文学と歴史

期　間　昭和五七年七月一日～昭和五七年十二月三一日

氏　名　オロフ・グスタフ・リディン

現　職　コペンハーゲン大学教授

研究題目　荻生徂徠の研究

期　間　昭和五七年十一月八日～昭和五七年七月十四日～

国際交流基金フェロー

氏　名　V・ウィンケルヘフェロヴァ

現　職　プラハ外国語学校日本語教授

研究題目　最近二十年間の日本文学

期　間　昭和五七年七月十四日～昭和五八年一月十三日

氏　名　G・スヴィリドフ

現　職　東洋学研究所レニングラード支部研究員

研究題目　日本文学史

期　間　昭和五七年十二月二六日～昭和五八年四月二五日

日本学術振興会外国人研究者

氏　名　呂　元明

現　職　中華人民共和国教育部東北師範大学外国研究所教授

研究題目　・日本文学史的分期問題研究

・「古事記」研究

期　間　昭和五七年十一月二六日～昭和五八年一月二四日

外国出張

（文部省在外研究員）

氏　名　伊井春樹

渡航先国　アメリカ・連合王国・フランス

目　的　欧米における日本古典文学関係資料の調査

期　間　昭和五七年八月八日～昭和五七年十月七日

（国際研究集会）

氏　名　内藤衛亮

渡航先国　香港

目　的　国際ドクメンテーション連盟第四十一回総会出席

期　間　昭和五七年九月十一日～昭和五七年九月十七日

海外研修旅行

氏　名　安澤秀一

渡航先国　ハンガリー・オーストリア

目　的　第八回国際経済史会議出席

期　間　昭和五七年八月十一日～昭和五七年八月二十五日

評議員会議の開催について

評議員会議史料部会が九月二十四日(金)に当館中会議室において、石井部会長ほか七名の評議員の出席、秀村選三氏ほか四名の運営協議員（歴史関係）の同席を得て開催され、史料館の運営について評議が行われた。

又、本年度第二回評議員会議が三月十一日(金)に当館大会議室において、石井議長ほか十四名の出席を得て開催され、昭和五十八年度予算について、昭和五十七年度事業（中間）報告及び昭和五十八年度事業概要等について評議が行われた。

運営協議員会議の開催について

本年度第一回運営協議員会議が十月二十八日(木)に当館中会議室において、十八名の運営協議員の出席を得て開催され、小山館長を議長に、神保五

利用者へのお知らせ

◆『マイクロ資料目録』の一九八二年版が刊行されました。この目録には、以下の三六所蔵者（文庫）分、八、九二三点が収録されています。三六所蔵者（文庫）のうち二一が今回初めて収録されるもので、この中には古筆切や往来物のまとまったコレクションも含まれています。

文庫No.	所蔵者
4	東京大学文学部国文学研究室
14	香川大学附属図書館（神原文庫）
19	国立公文書館内閣文庫
20	宮内庁書陵部
30	刈谷市立刈谷図書館（村上文庫）
32	水府明徳会彰考館
34	神宮文庫
36	松平頼明
37	本居宣長記念館
48	名古屋市蓬左文庫
51	大阪市立大学附属図書館（森文庫）
55	陽明文庫
73	今治市河野信一記念文化館
80	愛知教育大学附属図書館
81	佐賀県立図書館
82	日本大学総合図書館
83	畠山記念館
84	広島文教女子大学図書館
88	東京芸術大学附属図書館
89	名古屋市鶴舞中央図書館
90	宮城県図書館（伊達文庫）
91	鹿児島大学附属図書館（玉里文庫）
95	東京国立博物館
99	高知県立図書館（山内文庫）
200	東海学園女子短期大学図書館（哲誠文庫）
202	逸翁美術館
203	斎藤報恩会
ア1	庵逧巌
ア2	阿岸家
ソ1	反町英作
タ4	高橋伸幸（うもれ木文庫）
ト4	徳田　進（四孝文庫）
ナ3	中田光子
ホ2	堀江彦三郎（高田郷土文庫）
ヤ3	山岸徳平
リ1	龍潭寺

◆『和古書目録 増加1（一九八二）』が刊行されました。昨年三月、当館創設以来、十年間に収録・整理された原本（写本・版本）の目録が、『和古書目録一九七二―一九八一』として、初めて刊行されましたが、その後一年間の増加分を収録したのが本目録です。謡曲関係の資料を中心に、収録書目数は約八六〇点です。久松国男氏（潜一氏旧蔵）と武者小路実光氏から寄託を受けた資料も収録されています。なお、久松氏からの寄託資料は、第二次分です。

◆『逐次刊行物目録』（一九八三年）が刊行されました。収録誌数は、前年より一〇〇誌余り増え、二、五七四タイトルです。

◆久松国男氏より故久松潜一博士蔵の資料が追加寄託されました。今回は二七点で、以前の分と合わせて、一二九点になります。延徳四年堯恵写『小倉百人一首』、冷泉為秀写、寛永十九年奥書、明応四年奥書他の『詠歌大概』四点、天正十四年写『桐火桶・愚見抄』、『三五記』二点、鎌倉期写、天文六年写の『竹園抄』二点など、貴重な資料を含んでいます。

また、武者小路実光氏より武者小路家伝来の資料六点が寄託されました。それぞれ、伝藤原信実筆と円山応挙筆の『柿本人麻呂像』二点、宗永筆『新六歌仙図』、及び『武者小路実陰懐紙』三点です。

◆『マイクロ資料目録一九八一年』の縮刷版が、笠間書院から発行され、市販されています。既刊五冊と合わせて、御利用下さい。

弼氏を副議長に選出し、運営協議員会議関係規程等及び管理運営等の概況（報告）について協議が行われた。

本年度第二回運営協議員会議が二月二十八日(月)に当館中会議室において、小山議長ほか十四名の出席を得て開催され、教官人事及び昭和五十八年度事業等について協議が行われた。

委員会日誌

昭和57年
9月29日　情報検索委員会（第一回）
11月10日　国際日本文学研究集会委員会（第三回）
12月17日　文献目録委員会（第二回）
昭和58年
2月24日　共同研究委員会（第二回）
3月2日　国文学文献資料収集計画委員会（第二回）
3月24日　古典籍総合目録委員会
3月29日　情報検索委員会（第二回）

訃報

当館評議員井上光貞氏（国立歴史民俗博物館長）は去る二月二七日御逝去になりました。謹んで哀悼の意を表します。

昭和五十八年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順、以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会　①〒一七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内

近代語学会　①〒一五四世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内

国語学会　①〒一〇一千代田区神田錦町三―十一武蔵野書院気付②五月二一～二二日③同志社大学

古事記学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文化研究所第六研究室内②六月十八～二一日③北九州大学

古代文学会　①〒一六七杉並区清水一―十一―十一県哲男方②六月十八～十九日③共立女子大学(予定)

上代文学会　①〒一五七世田谷区成城六―一―二〇成城大学文芸学部国文学研究室内

説話文学会　①〒一一二文京区白山五―二八―二〇東洋大学文学部国文学研究室内②六月二五日③東洋大学

全国大学国語国文学会　①〒一〇二千代田区三番町二八―六グラン三番町四〇五号桜楓社気付②六月四～五日③帝京大学八王子校舎

中古文学会　①〒六六三西宮市池開町六―四六武庫川女子大学国文学研究室内②五月二七～二八日③金城学院大学

中世文学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学徳江研究室内②五月二八～二九日③国学院大学

日本演劇学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②五月二八日③明治大学

日本歌謡学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第三研究室内

日本近世文学会　①〒一〇一千代田区神田神保町三―二七共立女子大学日本文学研究室内②六月二五～二六日③慶応大学

日本近代文学会　①〒一七八練馬区豊玉上一―二六武蔵大学人文学部内③学習院大学

日本口承文芸学会　①一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②六月五日③早稲田大学

日本文学協会　①〒一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇

日本文学風土学会　①〒二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内②五月二八日③上智大学

日本文芸研究会　①〒九八〇仙台市川内東北大学文学部内②六月十一～十二日③東北大学文学部

俳文学会　①〒一五七世田谷区成城六―一―二〇成城大学文芸学部尾形研究室内

表現学会　①〒四八〇―一一愛知郡長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内②五月十四～十五日③愛知県婦人文化会館

仏教文学会　①〒一四一品川区大崎四―二―一六立正大学国文学研究室内(西部事務局)〒六〇四京都市中京区西ノ京壺ノ内町八―一花園大学国文学研究室内②六月十八～十九日③立正大学大崎校舎

万葉学会　①〒五六四吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内

美夫君志会　①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会　①〒一七一豊島区西池袋三―三四立教大学文学部日本文学研究室内

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第二〇号
昭和五十八年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―一六―一〇
郵便番号一四二
電話(七八五)七一三一(代)
印刷所　株式会社　三興